

井伊大老

石川富士雄作

菊は栄える葵は枯るる

大徳川の末の世に

柳宮今は人もなく

彦根の太守井伊直弼

傾きゆらく礎の

千代田の城にぞ入りにける

安政大獄に沸き立てる

熱腸の志士血をすすり

尊王の敵攘夷の仇

今を時めく大老の

首級を狙う不適さや

我が子が為の宵節句

明日をも知れぬ己が身を

忘れて酌める祝酒

流れに淀む泡沫の

葵の紋に捧げたる

命は軽し大老が

仄かにゆるる雪洞の

燈火淡き侘しさを

そぞろにかこつ短歌

春浅み 野中の清水 凍りいて

底の心を 汲む人ぞなき

雪深々と降りしきる

万延元年春三月

雛の祭りの朝登城

警蹕の声下に下に

今大老の共揃

さしかかりたる桜田門

供の侍ことごとく

仆れて残る籠の中

凶刃踊り狂えども

威儀を乱さぬ井伊直弼

薩摩の浪士有村が

国賊井伊を打ち取ったり

打ち取ったりと

叫べど凍る壕の水

落花紛々雪紛々

踏雪蹴花伏兵起

白昼斬取大臣頭

噫噫時事可知耳

落花紛々雪紛々

或恐天下多事兆於此